



第41回 日産 童話と絵本のグランプリ

ほんとうなまえ 本当の名前

タカキ マユミ

ピン、ポン。
ぼくは、インターホンを押すと深呼吸した。

桜の花びらがまい散るころから、下校の時は四丁目まで遠回りして、「武田」と書かれた表札を何度も何度も見つめていた。

武田さんちは、コンクリートのへいに茶色のかわらの二階建てで、とても広そうだった。

夏休みに入ったら、最初の日の午前十時半に行くぞと、ぼくはひそかに決めていた。

「はい。どなたですか？」
「佐藤といいます。向山小学校の六年生で、猫のことで聞きたいことがあつて来ました」

インターホンからさわやかな声があると、玄関の鍵が開けられて、長い黒髪のお姉さんが立っていた。

「戸を閉めてもらっていいかな、猫が三匹いて、冷房もつけたまんまだしね」

ぼくは、すぐに野球帽をぬぐ。インターホンでぼくが子どもだとわかつて、すぐに玄関に入れてくれたのだと思っ

た。お姉さんは、ぼくでも知ってる高校の制服を着ている。

「えーと、なにかかな？」

「ぼくは、二丁目の佐藤道孝です」
何度も練習したとおりに、お姉さんの目を見てあいさつをした。

「『丸ちゃん』に会いに来ました。丸ちゃんは、去年の秋にこちらのおうち猫になったはずです。どうしても会いたくて……」

「もしかして『あかり』のことかしら？ キジトラで、しつぽが丸いめす猫？」

「そうです、しつぽが丸いから『丸ちゃん』」

「君の猫？ずつと探していたの？」

「その猫は地域猫で、……今はお姉さんの猫ですが、みんなでかわいがっていたのに突然いなくなっちゃって……」

「去年の十一月の終わりだったかな。その駐車場でわたしが見つけたの。やせ細って、毛もぼろぼろで、おしりから血が出てたわ」

「ずいぶんみんなで探したけど、だれに聞いても行き先はわからなくて、もう死んじゃったんだろうって。猫は死

ぬときは姿をかくすって、ばあちゃんと言ってたし」

ぼくは「みんなを」をすごく強調したつもりだった。

「どうして、うちにいるってわかったの？」

「春休みに、武田さんの家にいるみたいだって、友だちの友だちが言ってた。あれは間違いなく丸ちゃんだって……」

「きつと、一番下の弟の友だちね」

ぼくはそこまで言くと、緊張しまくっていた全身の力がするするぬけるのがわかった。

「待って。あかりをここに連れてくるね」

すぐに、お姉さんは丸ちゃんをだいてもどつて来た。八ヶ月ぶりだ！

「『あかり』よ。君の言う『丸ちゃん』かな？」

丸ちゃんだ！大きさもキジトラの模様も、目の形も、しつぽも何もかも丸ちゃんだ！

でも、うす目を開けてぼくを見る丸ちゃんなんの反応もしない。ぼくのこと、すっかり忘れちゃったんだろうか？

「『丸ちゃん』という名前だったんだね？」

お姉さんは、ぼくを見ずに丸ちゃんに話しかけたけれど、丸ちゃんは答えない。

「この子、寝てばかりよ。何才か、君、知ってる？」

「二十才。一番お世話してくれてた人が言っていました。『うちの裏庭で生まれた』って」

「えええ、はたち？猫って若く見えるねえ。毛が生え替わるからかしら。のら猫からおうち猫になったなんてすごいと思うわ」

「違います、のら猫じゃなくて地域猫です」

お姉さんは、とても驚いた目でぼくを見た。ぼくも、のら猫ということばに、すごく反応してしまったのが自分でも意外だった。

「ごめん、ごめん。のら猫なんて言ってしまった。取り消します、地域猫だったね」

お姉さんは、すぐに謝ってくれた。

ぼく達の丸ちゃんだからな、あかりじゃないぞ！心の中でぼくはさげんだ。しつぽが丸いだけじゃないからな、みん

なに優しいから丸ちゃんなんだ。丸ちゃんほだれの心もまんまるくしてくれる不思議な力の持ち主なんだぞ。
「わたし、人に慣れていたから迷子になったおうち猫だと思ったのよ。だから、貼り紙とかSNSに出ると思ってたの。いつになっても何もないから変だとは思ってたけど」

「丸ちゃん、人一倍なつっこい猫だから」
「地域の人に優しくされていたんだね」

丸ちゃんは、お姉さんの手の中でゆっくりまばたきをしながら、ぼくをじつと見た。

「暑さと寒さにずっとお外で耐えていたごほうびよ、老ニャンホームに入れたのはね」

「お姉さんのお家って、もしかして老ニャンホームなの？」

「うそ、うそ、そんな訳ないじゃない」
お姉さんが大きな声で笑ったので、丸ちゃんびつくりしたのか目を大きく開いた。

学校へ行く道、帰る道、ぼくは丸ちゃんに会えるのが楽しみだった。運動会やマラソン大会のたびに元気もらって

たんだ。給食でカレーが出た日や、算数の問題がすらすら解けた日にはうれしくて報告もした。

丸ちゃんに会える、と思っただけで、なんだかわくわくした。ブラシで夏毛を取ってあげると、気持ちいいのかわどをごろごろさせていたつけ。中学生になっても、毎日絶対に会いに来るからね、と約束してたのに。

きつときつと、丸ちゃんのファンは多く以外にも、いっぱいいたはずだ。丸ちゃんがなくなつて、さびしがつている人はどのくらいいるのかな？ まちがいなく、ぼくが思っているより多いはずだ。「ずっとあかりを探していたつてことは、返してほしいつてことよね？」

お姉さんは、真面目な顔をしてぼくに聞いた。ぼくは本当の気持ちをはかすように、頭を何度も何度も横に振る。「本当にいいの？」

ぼくは、今度は大きくうなずいた。「ぼくんちつて、猫を飼えるほど広くないし、生き物を飼つちやいけないアパートだし」

「そうだよね、飼えるんだつたらもつと

早く飼つてはるはずだものね」

丸ちゃんがぼくをすつかり忘れても、丸ちゃんが幸せならしいと思つた。

「丸ちゃんをよろしくお願いします。丸

ちゃんをかわいがつてあげてください」

お姉さんは、丸ちゃんをだかせてくれた。宝物のようにしつかりだくと、以前よりもずっと軽くなつていて悲しくなつた。

「やっぱり、かわいいなあ」

ぼくは、思わず言つてしまふ。

「さがしたんだぞ。やつと会えたね。生きててくれてありがとうね」

その時、勇気を出して会いに来たことが、本当によかつたと思えた。

それから、二週間後、ぼくはまた武田さんちに行くことにした。すぐに行つたら悪いと思つたけれど、二週間つてぼくには長い長い時間だつた。

インターホンから、あの日と同じお姉さんの声がした。面倒くさそうなおじさんやうるさそうなおばさんが出てきたら、すぐに帰つて来ようと思つていた。

暑い、とても暑い。去年よりずっと

暑い。武田さんちの庭のひまわりの花も元気がない。お姉さんは、丸ちゃんをだいていた。

「道孝君が来た日にね、このことを家族に言つたのよ。うち、家族が多くて十人もいるの。大事なことを決めるときは、『家族会議』で話し合うことにしててね」

家族会議つて聞いて、お姉さんの家はちゃんとした家なんだと思つた。そして、丸ちゃんは武田さんちの立派な一員なんだとうれしがつた。

「この猫ちゃんを今まで通り『あかり』つて呼ぶか、君が言うように『丸ちゃん』つて呼ぶかね、多数決にしたの」

ぼくは、すつかりあきらめていた丸ちゃんという呼び方に、目の前が急に明るくなつた。

「二対九で『あかり』だつたのよ」

それは当然だよ。半年以上もあかりつて呼んでかわいがつてきたんだもの。ぼくには、何も言えなかつたし、言つてはいけないとちゃんとわかつていた。

「わたし、一所懸命に説明したのよ。この猫は長い間地域猫で、近くの人

を励ましてきた立派な猫だつて何度も言つたの。そしたらね、全員が丸ちゃんつて呼ぼう、つて決まつてね。それから、もう丸ちゃんなんだよ」

もう、うれしくてうれしくて、ぼくは飛び上がりそうだつた。

「だつて、二十年も丸ちゃんだつたんだもの。君だつてそう思わない？」

ぼくがいない所で、お姉さんはがんばつてくれたんだなあ、うれしいなあと思つた。

「ありがとうございます。丸ちゃんに代わつてありがとうございます！」

ぼくは、これ以上おじぎができないくらいに頭を下げた。よかつたね、丸ちゃん。

「これ、お土産です。丸ちゃんが大好きだつたおやつです」

「丸ちゃん、よかつたね。プレゼントだつて」

お姉さんの笑顔が、丸ちゃんに向けられた。

「丸ちゃんには、わたしが知らない歴史があるのね。少しずつでよいから、教えてくれる？ わたし、これから部活だ

けど、いつでもだつこしに来てね」

ぼくがお姉さんへ金色の小袋を渡すと、丸ちゃんはぼくをじつと見て、丸いしつぽをちよつとだけ動かしした。そして、にやあ、にやあと元気に鳴いた。「君のこと、丸ちゃんはちゃんと覚えてるよ。自分が丸ちゃんだつていうこともね」

丸ちゃんの鳴き声を聞いて、ぼくは思つた。丸ちゃんは、ここにいる。確かに言ふと、ぼく達の丸ちゃんは、今もここに幸せに暮らしているつて。

タカキ マユミ

主婦 東京都

受賞のことば

誰にでも、大切な物語があると思つています。大方、世間に全く知られずに消えてしまふと思いますが、少しでも拾い集められたらうれしいです。明るい話だけでなく暗い話も、元気の出る話ばかりではない寂しい話も、パッチワークの布をつなげるように、紡いでいけたらいいなあと思つています。優秀賞に選んでいただきありがとうございました。

【受賞歴】 第33回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

審査員コメント

飼猫になっていた「あかり」が地域猫としての名前を取り戻したとき、「ぼく」は、猫にようやく再会した気持ちになります。地域猫なら、人と猫との共存のための処置をした証しとして「耳カット」されているのではないかという意見があつたことを付けくわえます。

宮川 健郎

